

【試し読み版】



2

【第 I 卷第 5 章】

# 5

---

逃亡したジンプリチウスが、朽ちた  
大木にびっくりりさせられた次第

まさにこの日、この時に、幼いわたしの思索の始まりがあった。目の前に展開する忌まわしいありさまを見やりながら、これは一体どういふことなのかとわたしは物思いに沈み、そしてどうすればやく逃げきることができの  
だろうと考えはじめたのである。でもそもそもいつたい、どこに向かつて逃げればよいのか。わたしのその頃の頭おっむの程度では、何かの妙案にたどりつくのはとうてい無理な話だった。それでも夕方あたりに、何とか森のなかへ逃げこむことには成功していたが、さらにここから、どこを目指していけばよいのか。わたしは道がどこへ通じてゆくのかも、森のなかがどうなっているのかも無知にひとしく、いわば〈凍れる海〉を抜けてゆく道がへノヴァヤ・ゼムリヤ(1)

の後ろを通過つて、遙か〈中国〉までどんなふう繋がつて  
いるのやら、それと同じくらい深い謎であった。

夜の漆黒の闇につつまれながら、とりあえずわたしは身の安全を確保したようではあったが、しかしこの森の暗さ以上に暗い、つまり物事を知らぬわたしの頭にとっては不安そのものでしかなく、枝葉の生い茂った藪のなかに隠れることにした。するとその場所にどこからか、苛まれ、悶え苦しむ百姓たちの声が聞こえてきたが、それに混じつて何羽かのナイチンゲールのさえずりも届いてきた。百姓を〈鳥ども〉と呼ぶ習わしが世にあるが、このナイチンゲールたちは、同類のけものを気にかける様子もなく、百姓たちに同情をいだいたり、そのあまりの災厄のために愛らし

い歌声を途絶えさせたりすることもなかった。そこでわたしも百姓のことを気にかけるのはやめにして、その場で横になり、ぐっすりと眠った。

さて朝になり、東の空に明けの明星がきらきらと輝きだしたころ、わたしは〈トトさま〉の家が大きな炎にすっかりつつまれているのを見た。それを消そうとする人など、どこにもいない。わたしは家のほうに向かって駆け出した。〈トトさま〉に使われていた誰かに会えるかもしれないと思ったのである。しかしわたしは、すぐさま五人の騎兵に見つかってしまった。騎兵たちはこちらに向かって叫んだ。

「おい若僧、こつちへ来な。来ねえとなりやあ、こん畜生め、こいつをぶっ放して、お前の首の穴から煙がたつよ

うにしてやるぜ」

そう言われたわたしは、棒切れのようにじっと立ちすくんでいるしかない。そして騎兵がこちらにどうしてほしいと思っっているのか、何のことを言っているのかわからぬまま、ほかんと口を空けていたのである。ところが連中は、目の前に泥沼があるためにこちらへ近づくことができず、明らかにひどくイライラしているようだった。さながら、初めて見る納屋の戸の前でじっと佇む猫みたいなものである。

やがて兵士の一人が騎兵銃をこちらへ向け、出し抜けにずどんと一発、撃ってきた。その轟音は木霊によって何倍にも水増しされ、気味が悪いことこのうえなく、そんなも

のを聞いたことも見たこともなかったわたしは、たちまち地面に卒倒してしまふ。恐ろしさのあまり、ピクリとも動かなかつたわたしを見て、騎兵たちはこちらが死んだものと思ひこみ、そのままにして先へ行つてしまつた。

さてわたしは、騎兵たちがいなくなつたにもかかわらず、その日はずっと起き上がる氣力をもてないままでいた。それからまた夜が来て、漆黒の闇につつまれると、ようやくわたしは体を起こして立ち上がったのである。森のなかを長いことさまよい歩くうち、遠くのほうに一本の朽ちた木があり、そこから仄かな光がちらちらと発せられているのが見えてきた。<sup>(3)</sup> わたしはまた新たな恐怖にとりつかれ、一目散に引き返したが、しかししばらく歩いているうちに、

同じようにまた光っている樹木に出くわした。その場から大慌てに逃げ出したことは言うまでもない。こうしてあちこちを歩きまわり、朽ち木から朽ち木へとめぐり歩いているうちに、その夜は過ぎた。そしてようやく、いつもと同じ愛すべき朝がわたしの助太刀をしようと姿を現わし、わたしをもう苦しめるなど、その明るい光で木々に指図をしてくれたのではあったが、しかしわたしの悩みはこれで終わりではなかったのである。

というのも不安と恐怖のせいで、わたしの心臓はすっかり縮みあがり、両脚は疲れ切り、空腹のせいでお腹は空っぽ、喉はからから、脳みそは愚かしい妄想に満ちあふれ、両の眼は眠気のために今にも閉じそうなのだった。しかし

それでもわたしは、今歩いている道がどこへ通じているのかも知らずに、ただ前に向かって歩きつづけた。そしてただひたすら先へと進むなかで、わたしはどんどんと人間たちの世界から離れ、森の奥深くへ入りこんでいったのである。あの時のわたしは、知性の欠如と無知とから生ずる結果をただ耐え忍び、肌身に感じていた——その寄って来たところをおよそ知ることもしない。知性をもたぬ動物であつても、もしわたしの立場にあれば、自分が生き残るために何をしなければならぬかを、わたしなどよりずっと正確に悟っていただろう。そんなわたしではあつたが、それでもふたたび夜のとばりが降りてくると、一本の木に空いた大きな洞うろのなかへ這いずりこんでいく、それだけの賢

さはもっていたのだった。そこを寢床にして眠るために。

〔訳註〕

- (1) (1) ロシアの北、北極海にある列島。V―15章にも言及あり。
- (2) ナイチンゲール (Nachtigall) は「小夜啼きよなき鳥どり」「夜啼きよなきウグイス」  
とも訳され、夕暮れから夜明けにかけて美しい声でさえざる小鳥。こ  
こでは神を讃える人間としての象徴性をもつ。中世の図像伝統では、キリ  
スト教的な謙讓の心と、貧しい生のなかで神を讃美する修道士の模範と  
しての意味を担う。このあとのI―7章を参照。
- (3) VI―21章註3の箇所と共鳴し合う。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストッフエル・フォン・  
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その②

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。  
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>